

「神と恵みの言葉にゆだねて」
使徒言行録 20 章 25－38 節

パウロは「神が御子の血によって御自分のものとなさった神の教会」(28)と語っています。教会とは建物のことではありません。教会とは、神さまが御子イエス・キリストの血によって私たちに御自分のものとしてくださった群れなのです。つまり、教会という群れは、神さまのものであり、神さまの御心によって存在しているのです。教会は、神さまが御子イエス・キリストの血をもって私たちを買い取るために代価を払い、私たち一人ひとりをご自分のものとしてくださっている神さまの救いそのものです。この神さまの憐れみと、独り子をさえ与えて下さる神さまの愛が、神の教会という群れを成り立たせ、支えているのです。

その群れの監督として立てられている長老たちに、指導者としての務めを果たすために、自分自身と群れ全体に気を配るようにとパウロは言います。パウロはまず、「あなたがた自身」に気を配りなさいと言います。なぜなら、聖霊によって任命された指導者は、教会を自分の好き勝手に支配したり、操ったりしてはならないからです。自分の思いが御言葉よりも優先されてしまっていることはないか、そのことにいつも気を配ることが大切なのです。そしてさらに「群れ全体に」気を配ることが求められています。神の教会が、人間の思いや言葉ではなく、神さまの御心と御言葉とが第一とされているか、そのために気を配るのです。

パウロが、このように大切な務めを彼らとの最後の別れの際に語ったのは、おそらくエフェソ教会の将来が決して楽観視できるものではないということを見通していたからではないでしょうか。教会の内外から神の教会を神さまのものでなくしてしまおうとする攻撃があるということです。おそらく、このような誘惑に遭わない教会はありません。けれども大切なのは、その誘惑にどのように向き合うかです。パウロは励ましながら語ります。「だから、わたしが三年間、あなたがた一人一人に夜も昼も涙を流して教えてきたことを思い起こして、目を覚ましていなさい」(31)。パウロは、教会に集う私たちが、羊の群れのように弱い存在であることをよく知っています。だからこそ自分が伝えた福音にしっかり立つようにと励ますのです。

「そして今、神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます」(32)とパウロは言います。ここには、パウロの御言葉に対する絶対の信頼が表れています。パウロは、このように神さまとその恵みの御言葉に完全な信頼を置いていたから、これから多くの危険が降りかかってくるのが予測されている中でも、彼らをゆだねることができたのです。

ここでパウロは、二つの面における御言葉の力について語っています。その一つは、神さまの恵みの御言葉は、あなたがたを造り上げることができるということです。この「造り上げる」という言葉は、元々は「家を建てる」という意味の言葉ですが、「教会を造り上げる」という意味でも用いられています。この御言葉は人々を成長させ、そしてその御言葉を慕い求めて行く時に、一人ひとりが教会として造り上げられていくということです。そして、もう一つは、御言葉は、聖なる者とされたすべての人々と共に、御国と永遠の命を受け継がせることができるということです。教会は、神さまによって聖なる者とされた人々の群れです。それは、清く正しく生きている立派な人々の群れということではありません。そうではなく聖なる者とされたというのは、神さまのものでされたということです。御子イエス・キリストの血によって、罪にまみれた私たちを聖なる者としてくださり、そして御言葉によって、私たち一人一人をも、神の教会に招き入れてくださっているのです。

私たちには、この希望が与えられています。この御言葉を通して、神さまは私たちと共におられる、その平安と祝福を私たちに示してくださっています。そして、それがあからこそ、私たちは歩む力が与えられている。神さまの御言葉に聞き従う者として歩む力が与えられているということを確認にしたいと思うのです。